

学生海外調査研究	
17～18 世紀のフランス・モードにおけるアンディエンヌ受容に関する資料調査	
権 裕美	比較社会文化学専攻
期間	2009 年 9 月 9 日～2009 年 9 月 30 日
場所	フランス パリ、ミュルーズ
施設	ミュルーズ染織美術館・図書館、トワル・ド・ジュイ美術館、国立公文書館、自然史博物館付属図書館、装飾芸術美術館付属図書館、フランス国立図書館（フランソワ・ミッテラン館、リシュリユー館）

### 1. 海外調査研究の必要性及び目的

フランス語で「インドの」という意味の *indienne* アンディエンヌは、インドから到来した多彩な色彩と図柄のある綿布、すなわちインド更紗を指す言葉である。17 世紀前半にアンディエンヌが輸入されるようになるまで、リヨンを中心として絹織物産業が盛んであったフランスでは、17 世紀後半に東インド会社によりアンディエンヌを大量に輸入するようになることになると事情が変わることになる。アンディエンヌは、多様で繊細なデザインや美しい色彩だけではなく、堅牢度が高く軽いという特徴から、リヨンの絹織物にとって代わることとなったからである。そして、アンディエンヌという言葉もその意味を次第に広げ、インドで生産された綿布だけではなく、フランスで模造・生産された模様付きの綿布も指すようになった。アンディエンヌは布地の特徴から部屋着に多く使われ、アンディエンヌという語は、これで作られた部屋着も意味することになった。

大流行となったアンディエンヌの影響で、フランスの絹織物産業は打撃を受け、次第に衰退を余儀なくされ、国務会議では自国の織物産業を保護するため、1686 年アンディエンヌの輸入を禁止することを決定した。しかし、禁止令にもかかわらず、アンディエンヌの人気は衰えることはなく、むしろ徐々に高まっていた。アンディエンヌの流行は、1670 年のモリエールの戯曲『町人貴族』や、1672 年、1689 年のセヴィニエ夫人の手紙からもうかがい知ることができる。そして 18 世紀には、アンディエンヌは、部屋着や散歩に着用する軽い衣服に限らず、カーテンや椅子、寝台などの調度品にまで使われ、生活空間を彩ることになった。なぜ当時の人々はアンディエンヌに熱中したのだろうか。朝の散歩の軽装や、プライベート空間で用いる部屋着に使われたアンディエンヌの実態や機能を調査し、アンディエンヌを好んだ当時の人々の情緒や美意識を明らかにすることが、筆者の研究の目的である。

そのためには、まずアンディエンヌという織物の

捺染技術、色彩、図柄などについての調査が第一歩である。したがって、フランスでの捺染工程の記録を残している各地の染織美術館および図書館における史料の収集が必要である。また、アンディエンヌに関する禁止令や貿易については、フランス国立図書館および国立公文書館における文献調査が必要である。染織品と服飾遺品については、18 世紀に捺染産業が盛んであったミュルーズの染織美術館や、ベルサイユ宮殿から数キロ離れたジュイ・アン・ジョザスに、かつてのジュイ工場に開館されたトワル・ド・ジュイ美術館において、実物資料を調査する必要がある。

### 2. 調査の概要

調査は大きく分けて図書館でのアンディエンヌの捺染技術、貿易、禁止令に関する文献資料調査と、染織美術館での衣服、調度品の実物資料の調査および収集である。それぞれの染織美術館は長い歴史や伝統を持ち、貴重な遺品を所蔵している。

#### (1) ミュルーズ染織美術館 (Musée de l'Impression sur Étoffes de Mulhouse)

ミュルーズ染織美術館はパリから TGV で 3 時間かかる東の町、ミュルーズ市にある。昔から染織を中心とした工業町であったためか、思ったより大きく、よく整備された都市であった。ミュルーズでは 1746 年に、最初のアンディエンヌ生産工場が設立された。当時ミュルーズはフランス領ではなく、スイスと同盟関係にある都市共和国であったため、フランスの輸入禁止令の影響を受けず、ミュルーズではアンディエンヌの生産が活発に行われた。

ミュルーズ染織美術館は 18 世紀中盤、ミュルーズに基盤をおいたアンディエンヌ産業を継承しており、歴史からも所蔵品の豊富さからも価値ある美術館である。ミュルーズでは、1826 年にミュルーズ工業協会が設立された。1833 年からはミュルーズで染織に従事しているデザイナー（図案家）と製造業者の強

い要求に応じて、プリントされた布地の見本やデザインが本としてまとめられ始めた。その後、1857 年にデザイナー・グループがそのコレクションをもとに最初の産業デザイン美術館を設立、これを母体として、1955 年 10 月 11 日、今日のミュルーズ染織美術館が誕生した<sup>1)</sup>。

この染織美術館では、18、19 世紀の捺染技術の方法と展開を一目で見ることができる。18 世紀に捺染に使われた木型のほか、木型に文様を刻み込むための道具や、19 世紀の工業化以降に使われたローラ捺染機が 2 台展示されており、捺染の方法や技術の歴史を知ることができる。染織品については、長い時間を経ても変色が殆どない 18、19 世紀の遺品が展示されており、アンディエヌの堅牢度の高さ、デザインの優秀さを目で見て感じる事ができた。

一方、染織に関する図書を 18 世紀の手稿本から現代の書物に至るまで 9000 冊が所蔵されている図書館は、美術館とは 10 分ほど離れた別のところにあり、研究者のみが予約制で利用できる制限された場所である。ここは、所蔵品の保管や図書の管理と共に学芸員の研究施設でもある。ここでは、チーフ学芸員であるジャクリヌ・ジャック (Jacqueline Jacqué) 氏から惜しめない支援をいただき、18 世紀の見本布、および未公開の貴重な所蔵品であるアンディエヌの服飾を実見することができた。18 世紀アルザス地方の工場で生産された見本の布の約 150 点は、傷みが激しかったが、同じ布は一枚もなく、多彩な色彩や多様なデザインが生産されたことを証明してくれるものであった。所蔵品はアルザス地方の生産品に限らず、18 世紀後半に全盛期を迎えたジュイ工場の見本も約 20 点見ることができた。その中には、枕に使われたと思われる裂れや、衣服の一部だと思わせる縫い目のあるもの、裏面に壁に掛けるためと推定される輪状のものが縫いつけてあるものなどがあり、アンディエヌが衣服だけではなく、さまざまな生活用品として使われたことを思わせるものだった。実見した服飾遺品の中には、18 世紀アルザス地方の工場で生産された印が押され、白い布地に小さな花柄がプリントされたギャザー・スカート 1 点があった。また、生産工場の印はないが、18 世紀の遺品と推定される白地に花や鳥、木などがプリントされた子どもワンピース 1 点、黒地に花柄がプリントされフードが付いたマント 1 点、デザインは異なるが、白地に華やかな花柄がプリントされた上着の 4 点を実見できた。子ども服や、マントの形状の遺品は、これらに関する詳しい情報は得られていないものの、これまで指摘されたことのない貴重な事例として、モードにおけるアンディエヌの研究にとって重要である。現地調査による大きな収穫である。

一方、閲覧した手稿本『模様染めの綿布の製造と取引について』<sup>2)</sup>は、1766 年にパーゼルの染織工場主であったジャン・リーイネル (Jean Ryhiner) によって記されたもので、模様染めの綿布の技術につい

てのかけがえのない貴重な資料である<sup>3)</sup>。19 世紀には、科学の発展と共に染織に関する体系的な書物が続々と刊行され、ミュルーズ染色美術館図書館にも何冊かの書物が保存されているが、18 世紀に関する資料は、上記のジャン・リーイネルの手稿本が唯一である。本書は 334 頁にわたって手書きされ、捺染の技術を教えてくれる資料として今後、分析を行いたい。

## (2) トワル・ド・ジュイ美術館 (Musée de la Toile de Jouy)

パリから外郭線の電車 RER で 30 分ほど行くとパティ・ジュイ・レ・ロジュという駅があり、ここから徒歩 15 分ほど歩いたところに綺麗な庭園がある美しい美術館がある。この美術館はベルサイユ宮殿と電車で 1 駅の距離でもあり、地理的立地からもトワル・ド・ジュイの製品がベルサイユ宮殿の供給源であったことが実感できる。本美術館は、当初はジュイ工場を設立し大きな成功を収めたオベルカンプの名前を取ってオベルカンプ博物館と呼ばれたが、その後ここで生産されたアンディエヌを意味するトワルを加えて、トワル・ド・ジュイ博物館という名に変更された。

ジュイ工場は、1759 年アンディエヌの禁止令が解除された年に建てられた。ここで生産されたジュイ更紗はアンディエヌを代表する言葉として使われ、1760 年から 1840 年までのジュイ工場はもっとも栄えた。この工場を基盤として生まれた美術館にはアンディエヌの見本、織物断片やカーテン、寝台の調度品や、オベルカンプ自身が着用した部屋着、および彼の妻のローブなど多くの服飾遺品が常設展示されている。これらは実物資料としてアンディエヌの研究をより展開させるために役に立つ重要な資料である。例えば展示されているものの中で 18 世紀後半に使われた 2 台の寝台には、カバーと天蓋に、世界を構成する地、気、火、水の四元素の神話、ラ・フォンテーヌの寓話が一幅の絵画のようにプリントされている。アンディエヌの多様なデザインには神話、寓話の物語も主要なテーマとして使われたことが明らかである。アンディエヌが寝台に使われた事実は、当時のモード雑誌『キャピネ・デ・モード』の 1786 年 2 月号および 6 月号に証言がある。当時の記録と共に実物資料を検討することが必要であろう。

学芸員のアンヌ・ド・トワジ・ダレム (Anne de Thoisy-Dallem) 氏の好意で、未公開のアンディエヌの貴重な所蔵品を実見する機会に恵まれた。ジュイ工場は 19 世紀前半まで盛えていたためか、所蔵遺品の半分は 19 世紀の製作になるものである。その中で、筆者の研究対象になるのは、18 世紀ジュイ工場で生産された灰色地に果樹がプリントされたジャケット 1 点、白地に花模様がプリントされたスカート、ジャケット、コートで揃えたローブ・ア・ラングレーズ 1 着、鱗模様の厚い布地を刺し子のように縫っ

たスカート 1 点、ストライプと花柄がプリントされたスカートとジャケットの組み合わせの 1 着である。服飾遺品には薄い綿布製もあり、厚地に綿を入れ刺し縫いした冬用と推測されるものもある。いずれも簡単なジャケット、スカートの形状で、盛装ではなく略装である。美術館には所蔵品の搬入時の記録が手書きで残されており、所蔵目録から遺品の製作年代や、持ち主の情報も得ることができる。トワル・ド・ジュイ美術館の所蔵品は、18 世紀後半のアンディエンヌの多彩なデザインと多様な用途を把握する上できわめて価値ある実物資料である。

### (3) 国立公文書館 (Archives Nationales)

パリの国立公文書館で閲覧したのは、17～18 世紀に繰り返し発布された国務会議の公文書であり、特に 1686 年フランスの自国の織物産業の保護のために国務会議の裁決で発布されたアンディエンヌ禁止令である。17 世紀後半、アンディエンヌに対する熱狂的な人気はフランスの経済を混乱に陥れるほどの社会問題であった。経済の混乱を避けフランス織物産業を保護するためアンディエンヌの輸入および使用禁令が決定された。

1686 年 10 月 26 日、アンディエンヌを禁止する国務会議の判決の序言にはアンディエンヌを禁止することになった状況が明確に示されている。まず、莫大な量のアンディエンヌの輸入は、外国への多大な金額の流出につながり、これは経済的混乱をもたらす。また、アンディエンヌの製造は、フランス産業の基盤であった絹、羊毛などの工場の倒産に繋がり、労働者の家族の破滅にまで繋がる<sup>4</sup>。ゆえに国務会議は、アンディエンヌを禁止する決定をしたわけである。

以来、75 年間 80 回以上の禁止令についての変更修正がなされた。その内容は白い綿布の捺染を禁止した後、亜麻布、麻布についても描き染めを禁止するなど、アンディエンヌの禁止についてより細かい規制が行われたと見られる。これに違反した時はすべての捺染道具が没収され、3000 リーヴルの罰金を課せられるなどした。繰り返し行われた変更修正はアンディエンヌへの熱狂の証でもあり、そこからアンディエンヌがどのように使われたかもうかがい知ることができる。禁止令の分析はアンディエンヌの特徴を把握するための基本的な作業でもある。

### (4) 自然史博物館付属図書館 (Muséum National d'Histoire Naturelle)

自然史博物館付属図書館で閲覧したのは、18 世紀のフランス人によって記されたインドの捺染技術に関する手稿本である。東インド会社の官吏であり船長であった、フランス人アントワヌ・ド・ボーリュエ (Antoine de Beaulieu) が書き残したこの記録<sup>5</sup>は、当時の捺染技術を詳細に伝えている。彼は 1735 年、シャルル・フランソワ・ド・システルネイ・デュ・

フェイの命令によって、ボンディシエリ [インド南部、コロマンデル海岸の街] において、捺染技術の展開と、アンディエンヌの伝統的な製造方法について調査し、それを記録として残したのである<sup>6</sup>。

フランスにおいてアンディエンヌの捺染技術は、インドから直接ではなく離散の民であったアルメニア人のインド、ペルシア、レヴァントを結ぶ国際交易路と共に、彼らによってヨーロッパに伝えられたというのが最近の研究書から明らかになっている。そして、インドにおいて染色という作業は、けがれた物質をとりあつかうという理由から職人たちはほとんど最下層であったため、捺染過程の秘密を知っているのは彼らだけであった。東インド会社の官吏として、ただ彼らの作業過程を観察し、それを報告するしかなかったが<sup>7</sup>、アントワヌ・ド・ボーリュエの記録は、フランス人のアンディエンヌに対する深い関心を示す価値ある史料である。しかも、1735 年というアンディエンヌ禁止令の最中に記された記録であることは、禁止令にもかかわらずアンディエンヌに対する熱情は冷めていなかったことを示している。捺染技術に関するもつとも古い資料として、本手稿本の調査研究は筆者には欠かせない。

### (5) 装飾芸術美術館付属図書館 (Bibliothèque des Arts Décoratifs)

ルーヴル博物館の北西側にある装飾芸術美術館の付属図書館は、装飾芸術のあらゆる分野に関する著作が所蔵され、研究者や芸術批評家、デザイナーなどに利用されている。ここではアンディエンヌに関する幅広い研究書および研究論文を閲覧することができ、広い視野でアンディエンヌと近世の織物産業について知見を得ることができる。たとえば、『18、19 世紀のプロヴァンスの装飾芸術』<sup>8</sup>、『プロヴァンスの織物』<sup>9</sup>など最新の関連研究書がある。また 1900 年代初頭から中期に書かれた研究論文「アビニョン、オランジュでのアンディエンヌ産業 (1677-1884)」<sup>10</sup>、「1680 年以前マルセイユのアンディエンヌ産業」<sup>11</sup>、「18-19 世紀ノルマンディでの捺染」<sup>12</sup>などである。アンディエンヌが貴族から庶民まで階層を問わず大流行したのは、輸入品である高級品のほかフランス国内生産による安価な品もあったからである。ゆえにフランスにおけるアンディエンヌの模造産業についての理解が必要である。こうした研究論文からはフランス各地で盛んだったアンディエンヌ産業の展開と、アンディエンヌの流行のメカニズムについて、より多くの知見を得ることができる。

### (6) フランス国立図書館 (Bibliothèque Nationale de France)

フランス国立図書館はフランスの一番重要な図書館として長い歴史を持っているだけに現在もフランス一の蔵書を誇る。そのため今回の海外調査研究に一番比重を置いたのも、この図書館における資料収

集であった。

まず閲覧したのは、18世紀モードの画像資料として最も貴重な、1778年から1787年まで出版されたモード誌『ギャルリー・デ・モード』である。このモード誌には男女の全身像や髪型が説明をつけて掲載され、これがファッションの伝達を役割とした最初の雑誌である。修論では、1912年の復刻版を用いざるを得なかったため、フランス国立図書館で原本を見ることは重要な課題であったが、フランス国立図書館所蔵本は、複数所蔵されているにもかかわらず、いずれも手彩色されていない版であった。マイクロフィルム版、その原本である4冊の『ギャルリー・デ・モード』、そしてリシュリュウ館版画室所蔵の『ギャルリー・デ・モード』もまた彩色されていない版であり、フランス国立図書館には彩色版が存在しないことは蔵書目録からも確かめられた。

リシュリュウ館の版画室の貴重本閲覧室では、『ギャルリー・デ・モード』と共に18世紀を代表するモード雑誌である『キャビネ・デ・モード』を閲覧した。『キャビネ・デ・モード』は、服飾に限らず、家具、銀器などの調度品をはじめ、生活空間のあらゆる装飾品の最新情報を伝える雑誌である。『キャビネ・デ・モード』は、日本の大学で所蔵されているのは1786年の刊行本のみである。リシュリュウ館には1786年から1788年まで所蔵されており、1788年刊行の雑誌からは、アンディエンスの服飾の事例を新たに発見することができた。

フランソワ・ミッテラン館では、染色技術とアンディエンスについて述べた論考を参照できた。アンディエンスの染織に関する1791年の資料「染色技法の材料」<sup>13</sup>は、ミュルーズ染織美術館で入手したジャン・リーイネルによる1766年の手稿本と共に染色技術についての重要な資料であり、ジャン・リーイネルの手稿本より具体的に体系的に記されている。

またアンディエンスの禁止について論じた当時の研究論文を見つけることができたのは成果であった。アンディエンスの禁令をめぐるのは、アンディエンスの自由な生産に対する賛成派と反対派が対立し、活発な論争が行われ、それは「アンディエンス戦争」と呼ばれた。この論争に関する1755年の「アンディエンスの禁止の利点と欠点について」<sup>14</sup>、および1758年の「フランスにおけるアンディエンスの自由な製造と使用の利点についての考察」<sup>15</sup>からは、アンディエンスの当時の社会的、経済的影響力を考察することができると思われる。

18世紀に、フランスをはじめとするヨーロッパ各

国で普及したアンディエンスは、江戸時代の日本でもヨーロッパから来航した大型船によって伝えられ、上流社会の間で珍重されていた。日本でも西洋でも人気を集めたアンディエンスについての筆者のフランス・モードからの探究がアンディエンス研究の発展に少しでも寄与できればよいと思う。今回の海外調査研究を通して得られた貴重な資料をもとに、アンディエンスの染色技法からその特徴までをまず分析し、モードにおけるアンディエンスを通して17～18世紀の人々の生活感情を考察したい。

## 注

1. *Histoire singulière de l'impression textile*, Musée de l'impression sur étoffes de Mulhouse, Édisud, 2000, pp.6-10
2. Jean Ryhiner, *Traité sur la fabrication et le commerce des toiles peintes*, 1766
3. 『ミュルーズ染織美術館1』学習研究社、1978年、213頁
4. *Arrêt du Conseil d'État du 26 octobre 1686*, Archives nationales, F12, 1403
5. Beaulieu, capitaine de Antoine de, *Manière de fabriquer les toiles peintes dans l'Inde*, Paris, 1734
6. ジョゼット・ブレディフ『フランスの更紗：ジュイ工場の歴史とデザイン』深い見子訳、平凡社、1990年、10頁
7. 深沢克己『商人と更紗—近世フランス＝レヴァント貿易史研究』東京大学出版会、2007年、165-187頁
8. M.-J. Beaumelle, G.& V. Guerre, P. Jaquenoud, *Les arts décoratifs en Provence du XVIIIe au XIXe siècles*, Aix en Provence, Édisud, 1993
9. Roux, Annie, *Le textile en Provence*, Aix en Provence, Édisud, 1994
10. H.Chobaut, *L'industrie des Indiennes à Avignon et à Orange(1677-1884)*, Avignon, Imprimerie Rullière, 1938
11. H. Chobaut, *L'industrie des Indiennes à Marseille avant 1680*, Marseille, Institut historique de Provence, 1939
12. Herta Wescher, *Impression sur étoffes en Normandie aux XVIIIe et XIXe siècle*, Cahiers Ciba, n°85, 1959, pp.27-33
13. Berthollet, Claude-Louis, *Éléments de l'art de la teinture*, Paris, 1791
14. Forbonnais, François Véron Duverger de, *Examen des avantages et des désavantages de la prohibition des toiles peintes*, marseille, 1755
15. Morellet, André, *Réflexions sur les avantages de la libre fabrication et l'usage des toiles peintes en France*, Paris, Damonville, 1758

**【指導教員のコメント】**

17世紀の東インド会社によってヨーロッパに大量に持ち込まれたインド更紗、あるいはその技術が伝播した中東で生産された綿布は、国内産業の保護をはかる輸入禁止令にもかかわらずフランスで大流行し、模造品の生産のために綿布産業の発展をもたらすことになった。インド更紗はこのように経済の展開に大きく関与したが、そればかりか、それまでの重厚な貴族の服飾を軽快なファッションに変え、新たな美意識を生み出した。更紗の部屋着は、18世紀には啓蒙主義の哲学者の思索のイメージに重ねられ、また私的な生活の快適性に価値を見出すブルジョア社会の倫理と相まって、新たな美意識の発現の場となったからである。このようなアンデイエヌ受容をめぐる生活思想の探究を目的とする権裕美さんの研究は、まず染織技術と普及の実態を調査することを必要とし、今回の海外調査研究は、手稿として残されている技術書の閲覧、および染織遺品の実見・調査を中心とするものであった。東西交易と東西のモードの交流という観点で、権さんの研究は意義があり、今後は技術の解明から受容の分析へと研究を深化させることが期待される。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 徳井 淑子)